

長野県・姨捨棚田地区における文化的景観形成の担い手
*Actual Condition and problems of Farmers and Groups who preserve
Cultural Landscape for Obasute Rice Terraces, Nagano prefecture*

内川 義行* 木村 和弘* 安田 和司**
UCHIKAWA Yoshiyuki KIMURA Kazuhiro YASUDA Kazushi

1. はじめに

長野県千曲市姨捨棚田地区では、その一部（約 3ha）が平成 11 年に「姨捨（田毎の月）」として文化財保護法における名勝に指定された。現在、同市はその周辺の地区全体（約 75ha）を、平成 18 年の同法改正により新たに設置された重要文化的景観区域として申請すべく計画案の策定に取り組んでいる。信州大学農学部はこの作業に協力・支援している。

文化的景観とは「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のために欠くことのできないもの（文化財保護法第 2 条第 1 項第 5 号）」とされる。

一方、棚田景観は持続的耕作の結果であるため、計画ではその方策の提案がまず求められる。耕作継続の条件提示の前提として、耕地条件・耕作方法・棚田活用の各種方策などが関係するが、ここでは特に「担い手」に注目した検討について報告する。

2. 姨捨棚田地区概要と現況土地利用

重要文化的景観の申請を検討中の区域には、棚田景観の構成要素であり、これを創出する原点である集落や、山林等も含まれるが、今回は農地を対象に調査を実施した。

姨捨の棚田は約 36ha・1,800 区画あり、うち約 9ha は等高線区画により圃場整備済だが、残る部分は狭小・未整備で、標高 460～560m、傾斜 1/6～1/10 の斜面に、千曲川・善光寺平を望み広がる。立地の特徴は交通の便に優れていることである。車ならば長野自動車道・上信越自動車道の更埴 IC から約 20 分、電車ならば JR 篠ノ井線・姨捨駅から徒歩数分の位置にある。その他、市内には国道 18 号線、しなの鉄道・長野新幹線も通過しており、都市部からのアクセスが容易である。

平成 18 年 7～9 月、1,799 区画の全農地を踏査し、土地利用等を把握した。調査結果を Fig. 1 に示す。棚田（水田）は区画数・面積とも全体の約半数を占める。また、不作付と荒廃地の合計値が、区画数で約 3 割、面積で約 2 割と目立つ。平成 17 年 12 月に実施した地元農家への意向調査¹⁾では、5 年後に耕作を断念するという世帯が回答者数（103 戸）の約 2 割あり、今後も耕作放棄地の増加が懸念される。

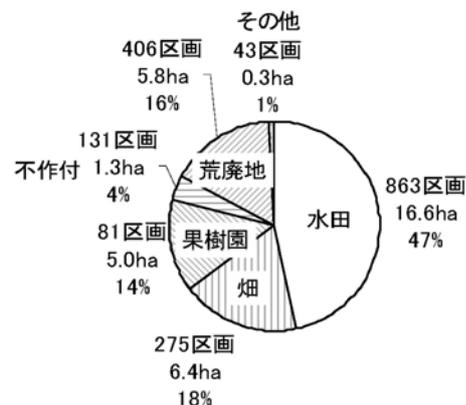


Fig.1 姨捨地区土地利用 区画数、面積・割合
Land use of Obasute district

3. 現在の担い手とその課題

現在、姨捨棚田地区の耕作は約 180 戸の地元農家と、4 つの団体（(1) 名月会（棚田貸し所属：信州大学農学部 Faculty of Agriculture, Shinshu University **鳥取県職 Tottori Pref.

キーワード：棚田、文化的景観、担い手

ます制度)(2) 四十八枚田保存会(3) 田毎の月棚田保存同好会(4) 科野農業塾)が関わる取組みによって支えられている。(1) 名月会は名勝指定地とその周辺 182 区画(水張面積 1.5ha)で行われている棚田貸します制度(オーナー制度)の約 50 組のオーナーへの指導や実施区画の日常管理他支援をおこなう組織で 18 名の地元農家からなる²⁾。(2) 四十八枚田保存会は同じく名勝指定地の 41 区画(水張面積 0.2ha)を会員とオーナーで保全する。(3) 田毎の月棚田保存同好会は約 50 区画(水張面積 0.6ha)を県職員とそのOB中心の会員約 30 名が耕作する組織である。そして(4)科野農業塾は地区周辺の農家や会社員 24 名からなり,16 区画(水張面積 0.2ha)を会員が耕作する。

4 団体の耕作主体と支援者の居住地関係を Table.1 に示した。耕作主体とは、田植え・稲刈り・脱穀等の主たる作業の実施するものを指す。表より、団体(1)(2)は耕作主体がオーナーで、会員はこれを支援する。一方(3)は耕作主体が会員でこれを支援する地元農家が存在する。さらに(4)は支援者がいないが、会員が近隣に在住しかつ農作業経験豊富な農家なので運営が成立する。

Table1 各団体における耕作主体と支援者の居住地関係
Living place of farming person and support person

	名月会・ 四十八枚田保存会	田毎の月棚田 保存同好会	科野農業塾
遠方 (県内外)	◎ オーナー	◎ 会員	
近隣 (市内)	○ 会員	◎ 会員	◎ 会員
地元 (地権者)	○ 会員	○	

◎:耕作主体 ○:支援者

各団体の耕作形態は様々だが、共通する重要な点として水管理等の日常作業や台風等の非常時管理への対応が可能な地元又は近隣在住者の参画がある。棚田管理は平坦地以上に気を遣うため、また耕作機械・資材等の保管管理にもそれらの人々の参画が不可欠である。

耕作継続困難な地元農家が増加する中、こうした団体への期待は大きく、耕作拡大を望む声もあるが、現団体の耕作地の総計は約 300 区画(水張面積 2.4ha)、対象地域総面積の 7%であり、彼ら自身は今の運営で手一杯というのが現状である。

また、今後は棚田耕作者・団体が、耕作持続の担い手としてだけでなく、文化的景観の担い手でもありと考えると、その役割をいかに保持しえるのかも大きな課題である。

4. まとめにかえて ~新たな担い手の模索~

担い手の現状を踏まえ、日常及び非常時管理等を含め考慮すると、今後は耕作主体が地元であり、これを近隣・遠方在住者が支援するという仕組みの可能性を模索することが望まれる。文化の継承者としての役割も担うとする課題に対しても、地元在住者の存在は大きい。一方、地権者でない近隣の農業熟達者が保全活動に参加する、科野農業塾の存在は新たな団体の動きとして評価される。現団体の規模拡大が困難で、その耕作面積は期待に比して少ないのが現状だが、これら団体の参画は、地域に対して耕作以外の効果も期待できるため、その役割を明確化した上で、新団体の導入も組み合わせた担い手支援策の検討が必要である。

(引用文献)

1) 木村和弘・内川義行：姨捨地区の文化的景観保全活用計画策定に関する調査研究，平成 18 年度受託研究報告書，2006.3

2) 内川義行・木村和弘・山田歩：棚田オーナー制度・地元農家組織による支援の現状と課題 - 長野県更埴市姨捨地区の事例から - ，H15 年度農土学会大会講演要旨集 pp.810-811，2003